

# バハレーンで古墳を掘る

—バハレーン、マカバ古墳群第1号墳第二・三次調査 2017/18—

西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所技術アドバイザー
吉村 和昭	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館学芸課長
上杉 彰紀	関西大学非常勤講師
岡崎 健治	鳥取大学助教
大藪由美子	土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム学芸係長
吉村 和久	九州大学名誉教授
鈴木 朋美	奈良県立橿原考古学研究所主任技師
齊藤 希	奈良県立橿原考古学研究所主任技師
岩越 陽平	奈良県立橿原考古学研究所主任技師

## Digging Up a Burial Mound in Bahrain: The Second & Third Research of Tomb No.1 at Maqaba Burial Mounds 2017 & 2018

SAITO, Kiyohide	Technical Advisor, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture
YOSHIMURA, Kazuaki	Section chief, The Museum, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture
UESUGI, Akinori	Part-time Lecturer, Kansai University
OKAZAKI, Kenji	Assistant Professor, Tottori University
OYABU, Yumiko	Subsection chief, Doigahama site Anthropological Museum
YOSHIMURA, Kazuhisa	Professor Emeritus, Kyushu University
SUZUKI, Tomomi	Researcher, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture
SAITO, Nozomi	Researcher, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture
IWAKOSHI, Yohei	Researcher, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture

### 1. はじめに

バハレーン・マカバ古墳群の調査の目的は、シリア・パルミラ人がティロス期(紀元前330年～紀元後629年)の文化にいかに関与したかを探り、1990年以来調査研究を行ってきた古代パルミラ社会のティロス社会への文化移入を理解することである。パルミラ人は、紀元前1世紀から紀元後3世紀に陸路ばかりでなく、海路にも隊商を編成し、東はインドまで進出している。そのためバハレーンは、格好の寄港地・基地として利用され、パルミラ人との交流は強く、その影響はパルミラ人のティロス社会への進出も生み出している。したがって、本調査によって、ティロス期の墓の考古学調査と種々の学術領域や手法を用いて、パルミラ社会とティロス社会の交流を可視化することを目的とした。その目的を果たすべく、2016年7月、バハレーン政府側から提示された4か所の調査地、ジャヌサン(Janussan)古墳群、マカバ(Maqaba)古墳群、アブ・サイバ(Abu Saiba)古墳群、シャホーラ(Shakhoura)古墳群の中からマカバ古墳群を調査地と

して選定した。

マカバ古墳群はバハレーン本島の北岸中央近くのマカバ地区内に位置し、ブダイヤ道路(Budaiya Highway)の南に位置する。古墳群は南北道路により東地区と西地区に分断されており、調査地は西地区を対象とした。この古墳群は、7基の大きな墳丘からなるが、発掘調査は古墳群中央に位置する最も大きな1号墳を対象とした(図1)。

2017年、本格的に調査に取り掛かり、2月に第一次調査としてマカバ古墳群全体と第1号墳の3次元計測調査、10月から12月に第二次調査としてマカバ1号墳の発掘調査を開始した。そして2018年10月から12月にかけて第三次調査としてマカバ1号墳の継続調査を実施した。本報告では、2017年度の第二次調査と2018年度の第三次調査の概略を記す。

### 2. マカバ(Maqaba)1号墳の第二次調査

マカバ1号墳は、古墳群西地区の中でも中央からやや西よりに位置する直径約60m、高さ約2.5mの円墳状の古墳であり、周辺を他の古墳で囲まれている。

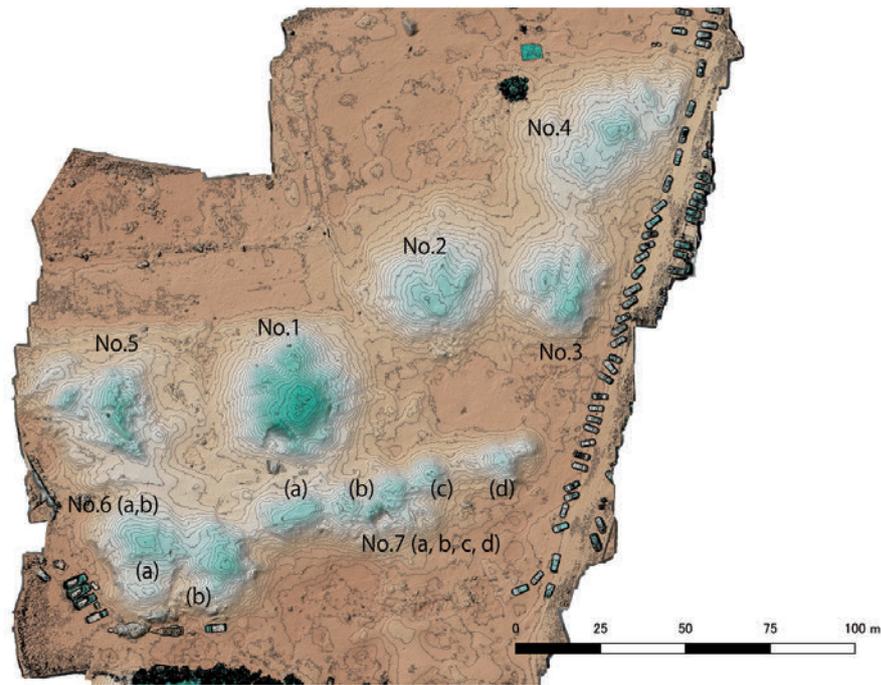


図1 マカバ古墳群西地区

調査にあたっては、この古墳を4分割し、墳丘に十字の試掘トレンチを設け、その結果4分の1にあたる南東地区(SE)を中心に発掘調査を2017年10月25日から12月9日まで実施した(図2)。

調査を行った南東地区からは盗掘と考えられる37箇所にもおよぶ不定形な土坑と埋葬施設と考えられる漆喰面を持つ遺構7箇所を検出した。その中で2017年度は2箇所の漆喰面を持つ遺構(F-0022、F-0027)を完掘した。その結果、漆喰面を有する遺構は、テイロス期に一般的に見られる埋葬施設であることが判明した。しかし、この施設が漆喰棺、漆喰槨、漆喰室と呼ぶべきなのかは現在、まだ定かではないため、ここでは棺と呼ぶことにする。この棺は、側壁、小口壁を両拳大の石材を漆喰を挟みながら積み上げ、棺内面にさらに漆喰を塗り、綺麗な面に仕上げている。床面も漆喰が塗布されている。棺を積み上げて造っていく際、棺壁裏側には土砂が積まれ、墳丘も造られていく。棺の構築途中と棺構築最終段階に漆喰で棺裏側に漆喰面が施される。そして最後に方形の棺に大きな石材数石で蓋をするが、天井石の隙間は漆喰で塞がれ、さらに盛土が施される。このように小さな墳丘を持つ墓が構築され、その集合体が大きな墳丘を造り上げていることが理解できた。しかしほとんどの棺は盗掘を受けていることも、発掘調査によって明らかになった。

F-0022：墳丘東側裾部に位置し、墳丘下20cm余り

で南西-北東を主軸とする全長300cm、幅150cmの不定形な隅丸方形の範囲で漆喰面を有する漆喰棺を検出した。漆喰面の中央には礫と漆喰片が混じる土砂が詰まった全長220cm、幅101cmの盗掘坑が存在した。棺は全長185cm、幅55cm、深さ70cm、四壁は黒漆喰が丁寧に塗られ、床面には白漆喰が塗られていた。遺体は盗掘により粉々になり、辛うじて盗掘土砂内に人骨片：頭蓋骨、大腿骨、踵骨、指等が出土した。さらに盗掘坑内からは施釉陶器片、青銅器細片が出土した。施釉陶器は、紀元後2世紀前後と考えられる。

F-0027：墳丘西南側裾部に位置し、墳丘下20cm余りで西南から東北を主軸とする全長332cm、幅184cmの不定形な隅丸方形の範囲で黒色の漆喰面を有する漆喰棺を検出した。ほぼ全面に広がった盗掘坑には大量の礫と漆喰片が混じる土砂が棺床面近くまで詰まっていた。棺は全長210cm、幅60cm、現状の深さ50cmである。しかし棺床面から漆喰面最上までは109cm、棺天井石が棺に直接横架されるなら、棺の深さは109cmの可能性がある。現状の棺四壁は黒漆喰が丁寧に塗られ、床面には白漆喰が塗られていた。遺体は盗掘により粉々になり、辛うじて床面に頭骨片、四肢長骨片を含む人骨数片が遺存していた。また人骨以外には棺底近くの盗掘攪乱土内から骨製ピンの頭部が出土した。この墓の築造時期は、不明であるが棺の構造上紀元後2世紀前後と考えられる。

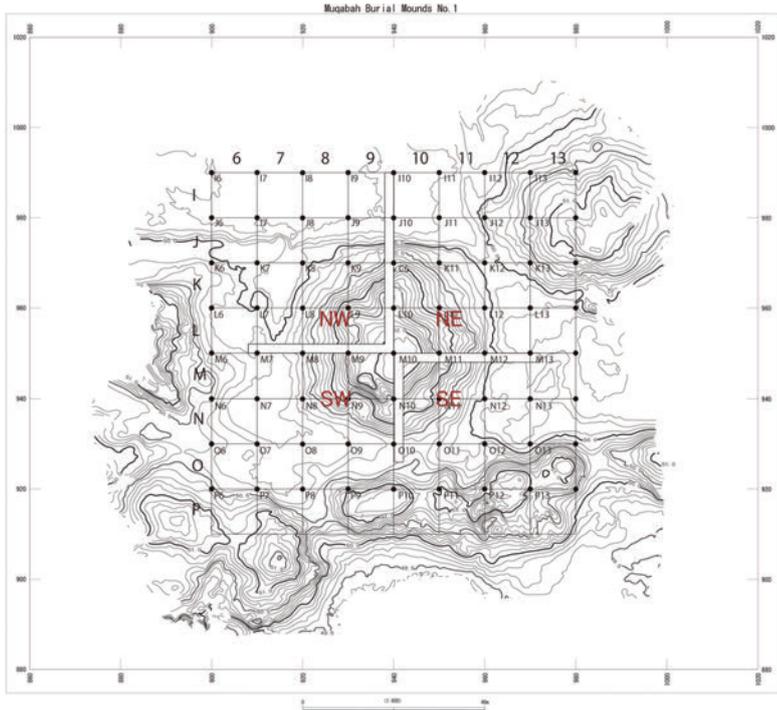


図2 マカバ1号墳調査区割



図3 F-0033～人骨と土器

### 3. マカバ(Maqaba)1号墳の第三次調査

2017年度に引き続き、マカバ1号墳の南東地区(SE)を中心に2018年10月23日から12月3日まで第三次調査を実施し、SE区を墳頂から裾部に約15mの範囲で、深さ約150cm水平に掘り下げ、埋葬施設6箇所(F-0017、F-0038、F-0056、F-0057、F-0060、F-0061)を検出し、4箇所(F-0017、F-0056、F-0057、F-0060)を発掘し、さらに2017年度検出したSE区東南裾に位置するF-0033、NE区墳頂に位置するF-0047と東裾部に位置するF-0028を発掘した(図4)。

#### SE区

F-0017：F-0027の北東に位置する。2017年度検出したが、非常に大きな盗掘坑の存在のために棺の存在を確認するのが困難な漆喰棺であった。漆喰面を盗掘排土下に僅かに検出するが、原位置ではなかった。しかし、その漆喰面が棺の方向を示す結果となった。棺は南西-北東を主軸とするが、南西小口を残し、棺の床面までほとんどが盗掘により破壊されている。棺の規模は全長約204cm、幅は南西小口で73cm、現状での深さ58cmである。現状の棺四壁は黒漆喰が丁寧に塗られ、床面には白漆喰が塗られていた。この棺には、今までに例が無い仕切りが設けられていた。この仕切りは棺小口から21cmの箇所

内の床面近くには盗掘から免れた完形のガラス瓶2点が出土した。ただし、人骨は肋骨の細片が数片出土しただけである。

F-0033(図3)：SE区南東裾に位置し、2017年度地表下10cmにて漆喰面が確認された。漆喰の範囲は全長約250cm、幅約120cmである。棺は漆喰棺で、南南西-北北東に軸線を有し、棺の大きさは全長178cm、幅約50cm、深さ約44cmである。棺四壁は黒漆喰が丁寧に塗られ、床面には白漆喰が塗られていた。棺内は攪乱を受けた形跡はあるものの、人骨と副葬品は遺存していた。人骨は少なくとも3体埋葬され、北北東を頭位とする2体が大人で、南南西を頭位とする子供が一体埋葬されていた。人骨の遺存状況から3体が同時に埋葬されたと思われる。しかし全ての人骨の全身が交連した状況ではないため、それらは移動していると思われる。遺体には副葬品が伴われ、正確にはどの人骨に何が伴うのかは明確ではないが、2体の大人の遺体の腹部付近から水差が出土した。この土器は赤褐色を呈したこの地域では珍しい土器であり、時期は3世紀前後と考えられ、この古墳の出土品としては若干新しい。また棺中央から西壁にかけて瀝青で固められた編物(籠)が数点あり、その中には筒状になった編物もあった。他の出土遺物としては、棺中央から北よりで小型青銅製ピン2点、紡錘車1点、不明の円柱状の

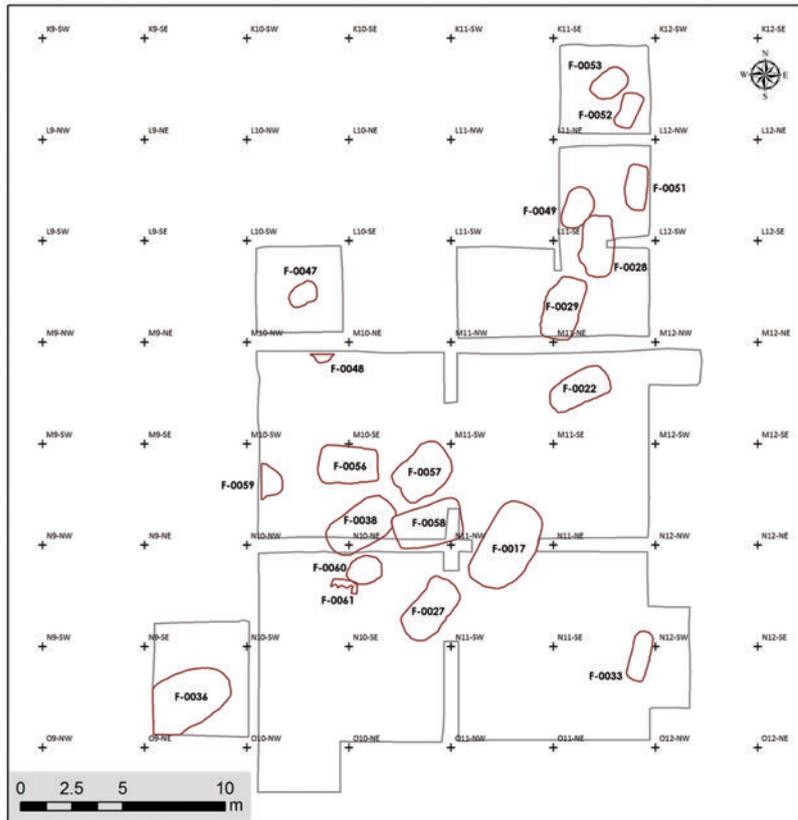


図4 マカバ1号墳SE・NE区調査遺構

小型青銅製品(編物の留め金具?)1点が出土し、さらに小さい青銅製品円盤(コイン?)が2点出土した。

F-0056: SE区の墳頂基準点から深さ約150cm、水平距離で約7m南東の地点で検出した西-東を長軸とする新たな漆喰棺である。この棺は、盗掘を受けたものの、天井石は遺存していた。盗掘は、天井石の北側中央の石材間の隙間を埋める石材と漆喰を外して行われたが、この盗掘坑の南側に位置する2石からなる天井石の西側の天井石の直上に紀元後1世紀から2世紀の施釉陶器の鉢が傾いた状態で出土した。この鉢は、供献された後、盛土が施行された際に動いたと考えられる。天井石を受ける棺壁の上面を覆うように施された隅丸方形の黒漆喰面は、全長290cm、幅178cmである。この漆喰面の中央に天井石2石が横架されている。天井石は2石で全長248cm、幅80cm~174cm、厚さ約14cmである。この棺の内部の発掘に関しては、2019年度に行うこととする。

F-0057: F-0056の東側に隣接する。主軸を南西-北東とする漆喰棺であるが、棺上面の漆喰面は、盗掘による天井石の撤去を含め、半分ほど破壊されていた。

その範囲は全長約200cm、幅約120cmである。棺の規模は全長196cm、幅57cm、深さ58cmである。現状の棺四壁は黒漆喰が丁寧に塗られ、床面には白漆喰が塗られていた。この棺には盗掘の埋土がほぼ床面まで達している。棺内には何らの遺物も遺存せず、人骨も細片が数片出土しただけである。

F-0060(図5): F-0027の西側に位置する盗掘を免れた完存する漆喰棺である。墳丘下約40cm、棺上面を整える漆喰面は東西に主軸を有し、全長180cm、幅139cm、中央には2枚からなる天井石が横架している。棺は全長103cm、幅59cm、深さ66cmである。棺四壁は黒漆喰が丁寧に塗られていた。棺底には白漆喰が棺台状に少し厚く塗られていた。その上には頭位を東とする幼児が仰臥伸展で埋葬されていた。この幼児は、装身具を多く身に付けていた。首にガラス玉、紅玉髓玉、石英からなる首飾り、両腕にガラス玉からなる手玉、両足首に青銅製足輪、右足首にガラス玉からなる足輪が装着されていた。さらに胸には着衣を留めたと想定できる鉄製ピンが出土し、遺体右側には青銅製ピンが置かれていた。盗掘を受けていない棺のため副葬品の在り方が理解できる棺である。



図5 F-0060～子供骨

#### NE区

F-0028：NE区東裾部で2017年に検出された漆喰棺である。漆喰の範囲は遺存状況が悪く、全長約250 cm、幅約140 cmである。棺は南-北に軸線を有し、棺の内側の大きさは全長211 cm、幅58 cm、深さ103 cm、天井石、棺両側壁、両小口壁の大部分が遺存しない。特に北西隅の破壊が著しい。しかし現状の棺壁は黒漆喰が丁寧に塗られ、床面には白漆喰が塗られていた。明らかに棺内は攪乱を受けた形跡はあるものの、南に頭位をとる大人1体が仰臥伸展した全身骨が出土した。しかし、この人骨の頭部は、埋葬後動かされていた状態で、他の部位は交連した状態であった。ただし、足首より下は残存していなかった。遺体には副葬品として青銅製のベル？1点、骨製紡錘車2点が伴われていたが、副葬されていた正確な位置は不明である。

F-0047：墳頂中心の基準点の北東約3 m、表土下10 cm余りに位置する漆喰棺である。この棺は盗掘を受けており、棺上部を表装する漆喰範囲の中央に位置する天井石は撤去されていた。漆喰の範囲は、南西-東北に主軸を有し、全長140 cm、幅約113 cmである。

棺は全長92 cm、幅45 cm、深さ54 cmである。棺四壁は黒漆喰が丁寧に塗られていた。規模から子供の墓と考えられるが、盗掘のため年齢を識別できる人骨は出土しなかった。遺物も全く検出できなかった。

## 4. おわりに

2017年、マカバ古墳群1号墳の発掘調査を本格的に開始したが、当初考えていた成果は、徹底した盗掘のため何ら得ることができなかった。強いて言えば、棺の構造がおぼろげながら理解できたことである。しかし2018年の調査では、この棺構造の理解が発掘調査を進展させ、7基の漆喰棺を発掘することができ、ティロス期の遺体埋葬法や副葬品のあり方の理解を進める結果をもたらした。特に6基のうちの1基(F-0060)は未盗掘墓であり、多くの情報を得ることができた。我々の目的とするパルミラ人や東地中海からの人々の関わりを探るという点において、人骨の資料を得たことは今後の研究を進める上で大いに役立つと考えられる。またフランス隊からティロス期の人骨サンプルの提供を受け、我々にとって力強い協力を得た。

今後、残された2年間にマカバ1号墳を継続して調査し、バハレーンの葬制の解明と共にパルミラとの関係が少しでも理解できることを期待している。

本研究は、科学研究費補助金『基盤研究(A)(海外学術調査)「バハレーン・ティロス文化に見るシリア・パルミラの人と文化の影響に関わる総合的研究」(課題番号16H02725)(2016年～2020年)』により実施した。本研究における調査の実施にあたってはバハレーン文化省考古遺産局 Dr. Mohammed Al Khalifa、Dr. Pierre Lombard、Dr. Salman Almahari 氏のご尽力の賜物であると共に、遺産局職員の多大な協力に感謝の意を表します。

## 調査参加者

2017年

西藤清秀、吉村和昭、上杉彰紀、岡崎健治、大藪由美子、杉山拓己、玉城妙子、佐々木玉季、原田怜

2018年

西藤清秀、吉村和久、岡林孝作、吉村和昭、上杉彰紀、岡崎健治、大藪由美子、鈴木朋美、齊藤希、岩越陽平